NEC Asia Pacific Pte Ltd. 訪問

すず学園高等専修学校　教員　平林　有希

１　はじめに

私立学校教員海外研修団は、2023 年 8 月 28 日午後に、本研修の視察先唯一の民間企業である NEC Asia Pacific Pte Ltd.を訪問した。はじめに会社の紹介を聞き、その後展示ルームにて歴史や事業内容の説明を受け、VR の体験をした。意見交換や質疑応答では、現地にいる日本人の方が感じる今の若い世代についての意見などを聞くことができ、大変有意義な時間となった。

NEC Asia Pacific の外観

展示ルームの入り口

２　会社概要

NEC Asia Pacific Pte Ltd.は日本電気株式会社（通称 NEC）の東南アジア地域統括会社である。1977 年に NEC シンガポール社設立、従業員は 1,684 人を超える。グループ会社は 289 あり、全世界で 117,418 人の従業員が日々新しい価値を創造している。「安全・安心・公平・効率」という社会的価値を創造し、誰もが能力を最大限に発揮できる持続可能な世界を推進するという理念を掲げている。

３　事業内容と特色

情報通信技術のリーディングプロバイダーとして、革新的なテクノロジーを提供している。顧客は大手企業（銀行、通信会社など）や政府である。MOE（シンガポール教育省）もそのひとつで、NEC 図書館システム（ロボットを活用した自動図書返却・ソーティングシステム、自動図書棚卸・格納場所チェックシステムなど）を提供している。

いま注力している事業は、ナショナルID、デジタルガバメント、デジタルファイナンスである。そのほかに、顔認証システム、デジタルヘルスケア、通信ネット

ワークシステム、デジタルトランスフォーメンション、都市開発プロジェクトなど、その事業は多岐に渡る。都市開発プロジェクトは現在マレーシアとシンガポールだが今後は他の地域も行う予定とのことである。

デジタルヘルスケアではリハビリ後に姿勢が戻っているか確認でき、どこをリハビリすれば良いかがわかる、この技術はこの高齢化社会の中で今後さらに必要になってくると感じた。

NEC の生体認証システムは 50 年以上の歴史があり、犯罪捜査にも貢献している。顔だけだと精度が完全ではないため、虹彩も組み合わせて認証しており、このシステムで双子でも見分けることが可能である。

NLB（シンガポール国立図書館）で使用しているロボティクスも NEC の技術である。最近は図書館でロボティクスのオートメーションが進んでいる。楽天銀行の口座開設の際のオンラインでの本人確認、空港での審査官なしでの出入国管理、三井住友銀行の顔認証など、NEC の技術が私たちの生活に身近にあることに気づいた。

質疑応答での、日本とシンガポールの若い世代を比較してどう感じるかという質問に対して「違いは感じない、飛び込んでみればできるだろう。必要なのは自分から動くこと。」という回答であった。世界で活躍したいと考えている若い世代に伝えたい言葉だと感じた。日本の IT 化が進まない理由については IT の習熟が不足していること、エンジニアが不足していることが挙げられた。シンガポールでは優秀な人材を政府や企業自ら雇用しており、優秀な人材であれば外国人も優遇されるとのことであった。

NEC が開発した衛星が印刷された１$札

VR を体験している様子

4　おわりに

学校を視察した際、MOE（シンガポール教育省）の方針が各学校へ浸透していると感じた。それは「全ての学校が良い学校でなければいけない」ということ、具体的にはひとりひとりのポテンシャルを発揮できるようにするということである。NEC を訪問し、その方針が学校だけではなくシンガポールの社会の考えでもあり、教育（学校）と社会がつながっていることを改めて認識した。

今回の研修の目的である ICT 教育についてだが、シンガポール滞在中、空港や学校、街の中などさまざまな場所で ICT が活用されていると感じた。

これから活躍する世代には必ず必要な技術だが、日本では ICT に苦手意識を感じている生徒も多く今後のどのように授業に取り入れていくのが課題であると思う。

日本で今まで行なってきた一斉授業はいまの時代には合っておらず、不登校や学力の格差などさまざまな問題が現れてきていると感じる、今後は「個」を理解し育てる教育が必要だと思う。ICT を活用した教育は「個」を育てることが可能であると感じている。

また、最近の若い世代に多く見られるメンタルの問題について、今回の研修の視察先の一つである United World College South East Asia では、ホリスティック教育[1]を行なっているという。今の時代の情報量の多さなど、さまざまな理由からメンタルに不調を感じる生徒は多い。私自身も日々この問題を感じており、ホリスティック教育を取り入れていきたいと思う。

シンガポールではさまざまなシーンで主体性とリーダーシップを育てること、そして社会貢献の大切さを教えている。学校ではチームで学ぶことが多く、日々の授業の中でコミュニケーション力とリーダーシップのスキルが身につくと感じた。また人を助けることにより自分の存在意義を感じるということに気付いた。

最後に、今回の研修中、どの視察先でも教育者の熱意と誇りを感じた。

また、研修に参加した視察団員の先生方の学び続ける姿に感銘を受けた。

良い教育を行うこと、そしてより良い社会になることを願い、私自身も学び続けていきたいと思う。

---

[1] 人はみな、地域や自然界との関わりを持ち、思いやりや平穏などの精神的価値観を追い求めることで、自己の存在証明、人生の目的や意味を見出していく次のような考え方に基づいて行われる教育のことである。ホリスティック教育は、人々の内に秘められている命への尊厳と、学ぶことに対する大きな喜びを引き出していくことを目指している。この定義は、専門誌「ホリスティック教育評論（*Holistic Education Review*）」（現在の「出会い：価値と社会正義のための教育（*Encounter: Education for Meaning and Social Justice*）」よりの引用で、この考え方の提唱者、ジョン・ミラーによる定義である。

参考：NEC Asia Pacific Pte Ltd.ホームページ　https://sg.nec.com/